

## 子どもの生活と学びに関する実証的研究

井上, 豊久  
福岡教育大学

<https://doi.org/10.15017/9070>

---

出版情報 : 生活体験学習研究. 6, pp.13-28, 2006-03-28. 日本生活体験学習学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 子どもの生活と学びに関する実証的研究

井上 豊久

## A Study about Life and Learning of Children

Inoue Toyohisa

**要旨** 研究では質問紙調査と重ね合わせ、子どもの生活を変容させることで学びを変容させようという取り組みのモデル事業を実施・検討した。具体的には昼休みを中心とした遊びを充実させることで人間関係づくりの能力や学ぶ意欲を増大させようとしている福岡県F小学校(1学年2クラス)、子どもの生活をメディアとのよりよい関係づくりを基本に変容させていくことで学びも変えていこうという埼玉県A小学校(1学年3クラス)等に関するものである。本研究では最初にテーマの概観を文献研究により行い、次に質問紙調査による学習理解度に関する分析とインタビュー調査による具体的なケース・過程を考察することにより今後の学びの変革への現実的な提案を示した。具体的に検討した内容としては1つは、子どもの生活と学びに関する経緯と課題を明らかにした。2つ目は質問紙調査結果を基に因子分析による総合的考察、学習理解度と子どもの生活意識・自己イメージとのクロス分析から子どもの生活と「学び」の構造を明確にし、最後にインタビュー調査から子どもの生活や学びの変容過程に関する試行的考察を行い、子どもに対する遊びやメディアとの主体的な関係づくりの取り組みの有効性及びその課題を動的に把握した。

### 1. 子どもの生活と学びに関する経緯と課題

「学力」の問題が大きく取り上げられるようになったのは、2000年に入り主として大学の理系の分野での基礎学力不足の指摘からである。その後、マスコミが大きく取り上げ、「体験活動」「ゆとり教育」の問題性を取り上げ、なかには例えば論者も出演した九州のテレビ局による「ゆとり教育のここがダメ」といった反対キャンペーンのようなものを展開したのではと結果的にはとらえられる番組も存在した。そうした中で「百マス」計算の陰山英男が当初は有名大学等への進学率の高さで取りざたされ(『陰山英男の「校長日記」』小学館2004年等)、やがて類似の基礎学習・訓練重視の傾向が全国的に強まっている状況であろう。従来からの

主張ではあったが、学力との関係も暗に訴えながら、最近では陰山英男も生活リズムの大切さを特に強調するようになってきている。

もちろん、基礎学力重視や、丁寧な学力指導は過去にもあり、アメリカでも1980年代には黒板とチョークがあれば学力は上げられるという「バックツーダベシク (back to the basic)」というキャッチフレーズで注目はされていた内容ではある。我が国の教育の流れを一つの見方から概観すれば、プラグマティズムと呼ばれるアメリカの教育学者J・デューイなどの影響を受けた戦後の「ラーニングバイドゥイング (learning by doing)」という考えに基づく体験重視の「学び」からエッセンシャルイズムと呼ばれるJ.S.ブルーナー

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

福岡教育大学(〒811-4192 宗像市赤間町文教町1-1)

Fukuoka University of Education (1-1 Akama bunkyocho, Munakata City Fukuoka Pref., 811-4192 Japan)

などの影響を受けた体系的な知識重視の「学び」へという流れがあろう。そして、1980年代からの生涯学習体系への移行に基づく「ゆとり教育」での体験重視の「学び」から2000年に入ってから「低学力」問題を発端とする学習指導要領改訂時期を待つこともない知識重視の「学び」への転換に移り変わりつつあるという大きな見方ができよう。

そうした中「学力」に関して実証的で有る程度まとまっている一つの研究成果として示されているのが荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』（岩波書店2005年）である。対象の厳密さの多少の問題等はあるが2時点間の比較を最重要点に据えた研究は現時点では説得力があるといえよう。しかしながら、生活調査を含み、階層という視点を取り入れているとはいえ、政策評価研究を焦点化して企図しており、可視化したペーパーテストによるものを主対象とし、そして学校教育での取り組みが中心として扱われているといえる。

福岡県では同和教育に関わる実態調査が福岡市、久留米市といった大きな市から嘉穂山田地区、甘木朝倉地区な農村部まで多くの市町村で以前から実施されている。そして全県的に少人数小学校低学年での学力向上研究が論者とも協働実施され、低学年での「学び」の習慣作りの大切さや学習の意味づけの重要性など着実に成果を示している。

論者も関わって実施・分析した古賀市（市内全員の小学2・5年生、中学2年生対象）・飯塚市（市内全員の小学5年生、中学2年生対象）などはそれぞれ1999年と2002年、2000年と2003年と学力向上の取り組みと共に2時点での生活と学力の実態調査分析もみられる。そこで、次第に示されてきたことは学校の取り組みと同時に家庭での取り組みを並行して行うことの必要性であった。例えば直方市では調査結果のダイジェスト版を作成し、2002年に家庭に対しても「あいさつをかわしあいましょう」「本に親しみ、本を活用する機会を持つように心がけましょう」「場に応じた言葉の使い方ができるようにしましょう」という生活での留意と同時に国語や算数を学ぶ意味を伝えている。一つの取り組み事例として例えば国語では聴く力（人が伝えようとしていることに耳を傾け、話の内容を創造し、相手の気持ちや思いを思い浮かべながら）、考える力、伝え

ることができる力を身につけ、心を豊かにするということが「なぜ国語を学習するのか」ということで示されている。話すことや自己表現よりもまず「聴く」という視点を示しているのは調査結果とともに長年の学力向上研究の成果にも基づくものであり、学びの態勢づくりの視点として参考になろう。現在、各地で学校からの働きかけで家庭教育の充実が図られているが、必ずしも成果がはかばかしくないというのが現状であろう。

昨年度の本学会誌13頁で論者が示しているように全体として閉じられた表面的な人的交流の中で生活している子ども達は、学習理解度と各種体験の有無の関連（平成15年9～10月3213人全国の小学4～6年生対象、日本学術振興会研究「子どもの心と体の主体的発達を促進する生活体験学習プログラム開発に関する研究」南里悦史代表の調査データから論者作成／論者も共同研究者の一員）は表1に示されるように多くの事項で示されている。

「学力」の問題が現在は論じられているが、論者が考える「学力」は知識重視からの脱却と言うよりも知識を支える学力を含めての学力ととらえる。すなわち、感性、自制力、自己計画・評価能力、もう少し視点を変えれば人権・同和教育では中心的課題である自尊心・自己肯定観、そして生活を自分で切り開き律することのできる能力であり、持続的に耐えられる心身の力であり、それへの過程である。しかし、そこまでの力や過程を学力と捉えるには現在は少し難しいのではと考えられ、「学び」と本論文テーマ等本稿では表現する。一生涯や多様な生活分野の統合を考えての学びを研究対象としてこそ、子どもにとって実質的によりよい成長が図られるのであり、子どもの生活構造全般を検討することによってこそ、有効な学習支援の方策が得られる。

そこで本研究では質問紙調査と重ね合わせて子どもの生活を変容させることで学びを変容させようという取り組みのモデル事業研究を実施した。具体的には昼休みを中心とした遊びを充実させることで人間関係づくりの能力や学ぶ意欲を増大させようとしている福岡県F小学校（1学年2クラス）、子どもの生活をメディアとのよりよい関係づくりを基本に変容させていくことで学びも変えていこうという埼玉県A小学校（1学

表1 体験と学習理解のクロス

質 問	合計	全部わかる	だいたいわかる	あまりわからない	わからない	有意差
1. 役場に行ったことがある。	44.1	53.5	43.5	41.4	50.0	*
2. この一年間に、子どもだけでバスや電車に乗って遠くまで遊びに行ったことがある。	39.8	42.1	40.4	35.7	35.2	
3. 子ども会などで、遠くでキャンプをして泊まったことがある。	25.7	32.8	26.2	19.9	22.2	***
4. おうちの人に頼まれてよく買い物に行く。	49.4	47.6	49.0	50.8	61.1	
5. お父さん(またはお母さん)がどんな仕事をしているのか、よく知っている。	78.6	88.2	78.6	73.8	77.8	***
6. おうちの人から、戦争の話や、戦争前の話を聞いたことがある。	43.9	60.1	43.2	38.7	48.1	***
7. 博物館や資料館で、昔の生活の様子を見たことがある。	54.9	64.9	54.8	50.6	50.0	**
8. この一年間に、ノコギリやナイフを使って木や竹を削り、工作をしたことがある。	48.7	57.9	47.8	47.1	61.1	**
9. 地域の清掃やお年寄りの世話などの奉仕活動をしたことがある。	22.7	31.7	22.8	11.1	14.8	***
10. お祭りや縁日に行ったり、おみこしを担いだりしたことがある。	69.7	8.7	69.8	63.1	74.1	***
11. 自分で種をまいたり、稲を植えたりして、植物を育てたことがある。	61.4	66.4	61.6	58.4	57.4	
12. 畑に行つて、いもほりをしたことがある。	49.2	52.4	49.2	46.9	53.7	
13. 川や海で、魚釣り、えびとり、かにとりなどをしたことがある。	66.4	69.7	66.3	65.0	70.4	
14. 昆虫を自分で10日間以上飼育したことがある。	49.6	58.3	49.6	44.3	50.0	**
15. 天体望遠鏡で、夜空の月や星を見たことがある。	24.9	11.2	24.9	19.5	20.4	***
16. 薪を燃やして、ご飯を炊いたり、料理を作ったりしたことがある。	41.7	48.7	41.2	38.9	50.0	*
17. 自分でお米をといでご飯を炊くことができる。	65.6	71.6	66.4	58.4	61.1	**
18. 自分のシャツなどは、自分で洗濯することができる。	39.0	50.2	38.6	36.3	35.2	**
19. 電池を使って動くおもちゃや道具を作ったことがある。	39.1	54.6	37.0	40.4	48.1	***
20. 落ち葉を集めたり、押し花をしたことがある。	49.1	58.7	49.5	44.1	29.6	***

年3クラス)等である。本研究では質問紙調査による学習理解度に関する分析とインタビュー調査による具体的なケース・過程を考察することにより今後の学びの変革への現実的な提案を示すこととする。

## 2. 因子分析による概観

「小学生の意識と生活に関するアンケート」質問紙調査結果は2005年10月から11月に実施された福岡県、山口県、鳥取県、埼玉県の小学4年生から6年生1344人を対象とした有効回答を基にしている。

質問紙調査における「小学生の意識と生活に関するアンケート」項目では、自分自身の考えや態度などに関して自己イメージで回答する形式の質問を設定している。

これらの質問とその回答をもとに、自己イメージでの評価がいかなる構造で構成されているのかを明らかにするため、多変量解析という分析手法を用いた。多変量解析という手法は、多くのデータをその回答パターンの違いによって、相互の関連性を数量的に示していくものである。今回はその中でも因子分析法を用いた。因子分析法は、今回の調査では、生活に関わる自己イメージについてのさまざまな39の質問項目の相互関連の強さを回答の推移によって分析し、それらの質問項目の背後に潜む共通の因子(要因)を探る統計的手法である。この手法を用いることにより、子どもたちの心身の状況の概要や発達の実態を総合的にとらえることができる。学習理解度とのクロス集計分析の前にこの因子分析による全体の概観を示しておく。

以下、この手法を活用した結果から考察を加える。「因子分析結果」内容は、共通の因子を構成している質問のかたまり(因子行列)を提示し、各項目の数字は因子に与える影響の度合いを示している。因子内の各(質問)項目は比較的関連性が強いものが集まっており、因子ごとに示されている因子負荷量は、各因子の影響度を示しており、全体(100%)の中でどのくらいの程度かを示している。また、因子の(質問)項目ごとに示されている数字は因子内での影響の程度を示しており、数字が大きいほど影響度が大きいといえる。

小学生に影響を与えている要因は、表2のように強い順に11のものが抽出された。(図中の番号は質問番号)

表2 子どもの総合的生活イメージに関する因子行列

1. 思いやり		
19	友達がいじめられているのを見ると腹がたつ	0.701
24	人のために何かしたいと思う	0.652
28	人や動物がケガをすると自分も痛い気がする	0.613
23	相手の立場になって考える	0.562
25	クラスで決められた仕事は責任をもってする	0.555
因子負荷量		6.552

2. 友達関係		
21	友達とうまくやっていく自信がある	0.689
40	自分のことをわかってくれる友達がいる	0.660
17	自分のことが好きだ	0.401
22	我慢強いと思う	0.396
43	一人でいるほうが落ち着くというわけではない	0.348
因子負荷量		5.594

3. 自己表現		
31	自分の気持ちを素直に出せる	0.728
26	自分が嫌だと思ったことは「ノー」と言える	0.668
30	たくさんの人の前で言いたいことがうまく言える	0.588
18	自分に良いところがたくさんある	0.445
因子負荷量		5.428

4. 自己感覚		
7	疲れていると感じる	0.673
36	自分がしていることが自分がしているように感じないことがある	0.549
39	他の人のおいが気になる	0.445
29	家にいてストレスを感じる	0.440
44	テレビ、MD、CDの音を大きくして聞きたいと思う	0.282
因子負荷量		5.219

5. 生命感覚		
33	自分の命は自分のものだから、自分で好きなようにしてもかまわないと思う	0.622
32	生きていても仕方がないと思ったことがある	0.607
35	今、生きててよかったと思わない	0.465
因子負荷量		4.698

6. 勉学	
20 学校の勉強は理解できている	0.646
38 勉強は楽しいと思う	0.630
2 朝、気持ちよく起きられる	0.484
48 長い時間立っていてもきつくない	0.407
因子負荷量	4.538

7. メディアとの接触	
13 メディアに触れる時間 (休日)	0.854
13 メディアに触れる時間 (平日)	0.838
14 食事中のテレビ視聴	0.413
因子負荷量	4.478

8. 外遊び	
16 平日に外遊びをする	0.759
15 平日にスポーツをする	0.754
45 右と左で視力の差がない	0.396
因子負荷量	4.318

9. 攻撃性	
27 人やものを殴ったりたたいたしよと思う	0.721
46 むかつくことがよくある	0.561
因子負荷量	4.003

10. 仮想性	
37 テレビドラマに出る家族は、本当の家族だと思う	0.698
34 たとえ命が失われたあとでも、生き返ることがあると思う	0.599
因子負荷量	3.493

11. 対人感覚	
41 タッチしたり、手をつないだり、ひっぱりあったりする遊びは嫌いだ	0.733
47 人の目を見て話すのが苦手だ	0.471
42 粘土、泥、砂などに触るのは好きではない	0.445
因子負荷量	3.479

因子抽出法：主成分分析回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法

第1の因子は「友達がいじめられているのを見ると腹が立つ」、「人のために何かしたいと思う」、「人や動物がけがをされると自分も痛い気がする」といった「思いやり」に関わる因子である。子どもたちの意識等に最も強い影響を与えるものとして、この「思いやり」が上がってきたということは、今も昔も変わらず子どもにとって「思いやり」というものが子ども世界の意

識や態度等にいかに大きな影響を与えるかを改めて知らせてくれたといえる。中でも一番目が「友達がいじめられたりしているのを見ると腹が立つ」といった基本的な人権意識に関わるものであり、こういった友達にかかわる身近な人権意識・態度醸成の重要性が子ども心身のよりよい発達の根幹であることが明白となった。次には「人のために何かしたい」という利他性、「人や動物がけがをしたりすると自分も痛い気がする」という実感・感覚的な想像性、そして「クラスで決められた仕事は責任をもってする」といった役割意識を持った責任感が関連していることがわかった。今後は、例えば役割を責任をもって果たす機会を設け、子どもを認めていくなど、こういった人権・参画意識・態度を育てていくための生活体験学習を含めた指導・支援が求められる。

第2の因子は「友達とうまくやっていく自信がある」、「自分のことをわかってくれる友達がいる」、「自分のことが好きだ」といった「友達関係」に関わる因子である。子ども達にとって友達関係はやはり重要である。そして、友達とのよい関係が自分のことを好きにさせてくれるということが推測され、自己肯定観を向上させるにも友達関係は有効であるということがわかる。ただし、この人間関係づくりが今の子ども達の最も苦手なものの一つであることも多々あり、異年齢での集団遊びでの積極的な活動の展開により居場所づくりなど今後の取り組みが求められる。

第3の因子は「自己表現」、第4の因子は「自己感覚」、第5の因子は「生命感覚」、そして第6の因子が「学校の勉強は理解できている」、「勉強は楽しいと思う」、「朝、気持ちよく起きられる」といった「勉学」に関わる因子である。勉強に関することは、「朝、気持ちよく起きられる」という基本的な生活習慣の確立と「長い間立っていてもきつくない」といった基礎体力の増進が関連していることが示された。学習への意欲づけと同時に体を負荷的持続的に動かす仕事や外遊びやスポーツといった体験活動の充実が図られる必要がある。

第7の因子は「メディアに触れる時間(休日)」、「メディアに触れる時間(平日)」、「食事中にテレビがついている」といった「メディアとの接触」に関わる因子である。食事のテレビ視聴はここでも平日・休日ともメディアとの総接触時間との関連性が示され、まず、

一つの方法として食事中にテレビを消すことから、メディアとの主体的な関係づくりをしていくことの意義が明確となった。

### 3. 学習理解と子どもの生活意識自己イメージの関係

質問紙調査において学びと直接関わる質問項目は「平日、学習塾もいれて学校から帰ってどのくらい勉強しますか」「勉強は楽しいと思いますか」と「学校の勉強は理解できますか」の3つである。現在、家庭での勉強時間は全体に短く、30分から1時間が約3割、1時間以上は約1割に過ぎない。勉強の楽しさは勉強の理解と関連しており、他の質問項目との関係はほぼ同じ傾向であるが勉強の理解度のほうが全体に差や関連が明確に出ていた。そこで、本稿では学力により直接関わる勉強の理解度と他の事項の関係をみて考察していく。ここでの勉強の理解度は質問内容に示される

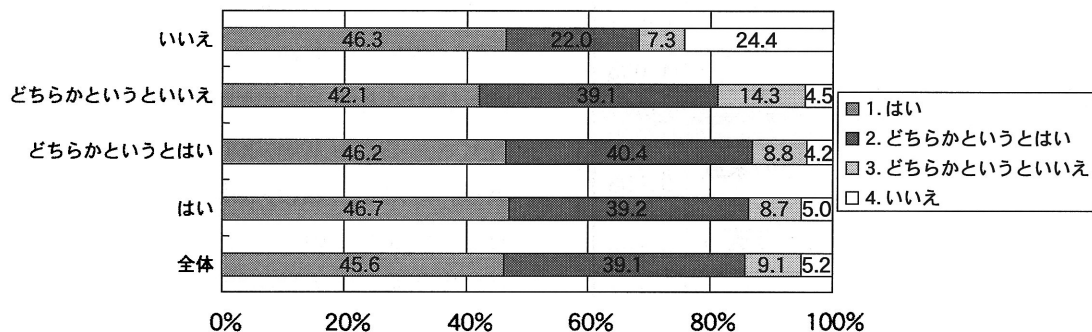
#### 1) 人権意識

ように「学校の勉強が理解できる」かどうかを「はい」「どちらかというとはい」「どちらかというといいえ」「いいえ」の4段階でたずねたものであり、あくまで子どもの自己診断であり、ペーパーテストによるものではないが、これまでの同和教育に関係した生活と学力実態調査等から小学生の場合、ほぼペーパーテストと同じ傾向を示すことがわかってきている。そこで、本稿では本調査に基づき特に子どもがどう考えているかという意味での学習理解を因子分析結果を考慮しながら順にみていく。なお、図中の番号は質問番号である。

#### (1) 思いやりに関わる事項

生活や学びにかかわる子どもの意識構造全体を考えた場合、前述の因子分析にみられるように「思いやり」に関わる内容が重要な位置を占めることが分かった。

質問 19. 学習理解と人権意識



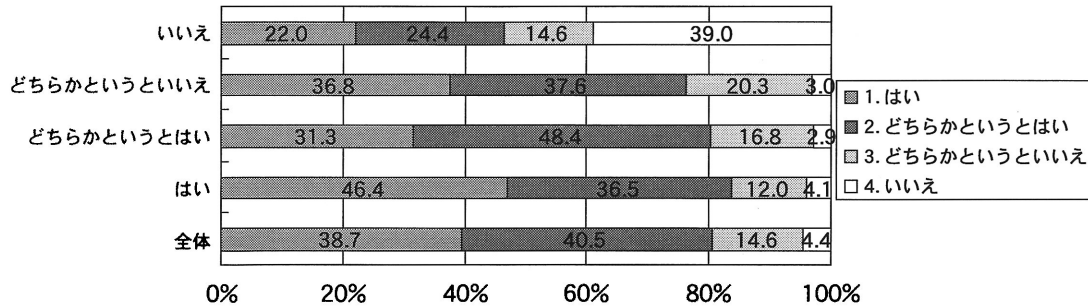
「友達がいじめられたりしているのを見ると腹が立ちますか」という質問事項と学習理解度のクロスでは  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。

「腹が立つ」と答えた子どものうち、学習理解で「はい」と答えた子どもは46.7%、「いいえ」と答えた子どもは46.3%と1%以下でほぼ同様である。しかし、「腹

が立たない」と答えた子どもで学習理解を「はい」と答えた子どもは5.0%、「いいえ」と答えた子どもは24.4%と、割合は19ポイント大幅に上昇しており、学習理解度が低い子どもの中に人権意識が低い子どもがある一定の割合存在し、問題を呈しているといえ、今後の焦点的な取り組みが求められる。

2) 利他性

質問 24. 学習理解と人のために何かをしたいと思うか

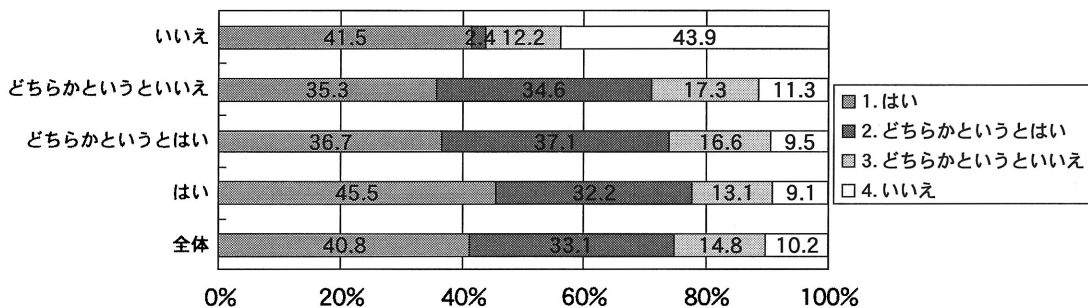


「人のために何かをしたいと思っていますか」という質問では  $P < 0.001$  にて有意差が得られた。「何かをしたい」と答えた子どものうち、学習理解を「はい」と答えた子どもは46.4%、「いいえ」と答えた子どもは22.0%であり、24ポイントと格差が大きい。また、「人

のために何かをしたいと思わない」と答えた子どもで、学習理解を「はい」と答えた子どもは4.4%、「いいえ」と答えた子どもは39.0%と、35ポイント割合を上昇させ、問題性を提示している。

3) 痛みの共有

質問 28. 学習理解と痛みの共有



「人や動物が怪我をしたりすると、自分も痛い気がしますか」、という問いでは  $P < 0.001$  にて有意差が得られた。痛みの共有に対して「はい」と答えた子どものうち、学習理解に対して「はい」と答えた子どもは45.5%、「いいえ」と答えた子どもは41.5%と、若干低い割合となった。また、痛みの共有に対して「いいえ」と答えた子どものうち、学習理解に対して「はい」と答えた子どもは9.1%、「いいえ」と答えた子どもは43.9%と、35ポイント割合を上昇させる結果となっている。この他、因子分析で第一位となった「思いやり」

に関して構成している質問事項「相手の立場に立つ」「クラスの役割ができる」といったことも学習理解と関係することが明確となった。豊かな人権意識に支えられてこそ、学びは伸び伸びと育っていくことが明白となった。

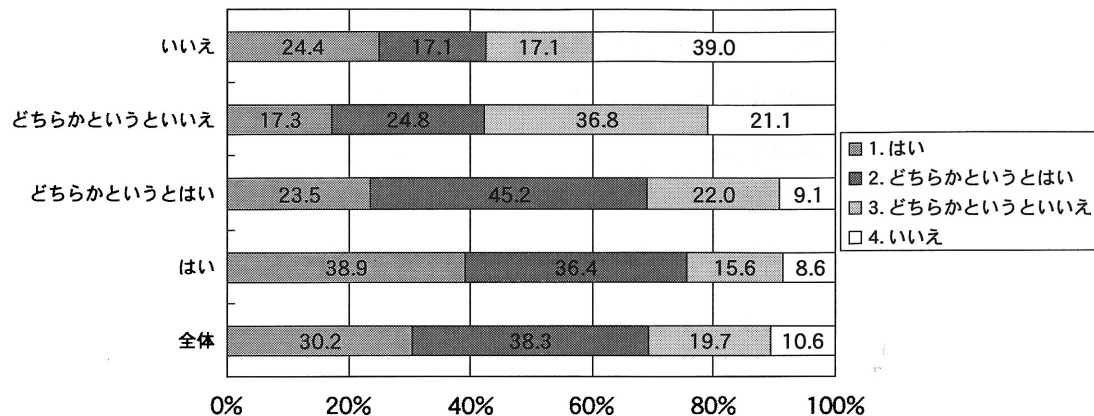
(2) 自尊感情

学力と自尊感情（自己肯定観に関わる）の関係の重要性はこれまでの数多くの研究成果から指摘されてきたことであるが、今回の調査でも改めて示された。



## 1) 自己愛

質問 17. 学習理解と自己愛

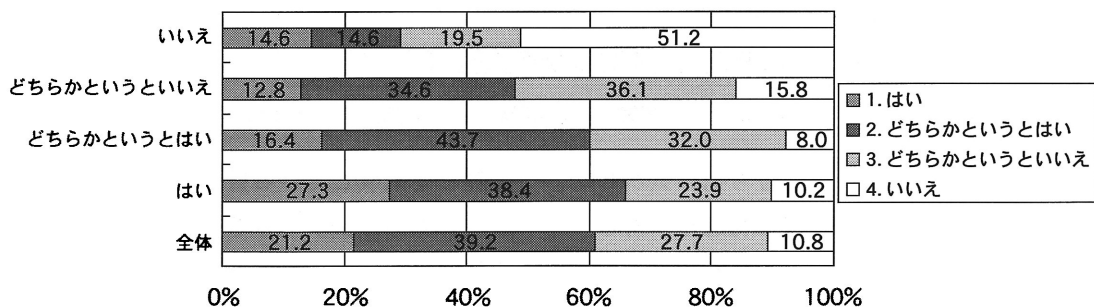


学習の理解度と「自分のことが好きですか」、という自己愛の状況において  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。「自分のことが好きだ」と答えた子どものうち、学習理解において「はい」と答えた子どもは38.9%、「いいえ」と答えた子どもは24.4%と、15ポイント理解できない子どもが割合が低くなった。逆に自分のことが好きでないと答えた子どものうち、学習理解において

「はい」と答えた子どもは8.6%、「いいえ」と答えた子どもは39.0%と、30ポイント高くなった。「勉強がわかる」という実感が自己愛を生じさせるということもあるが、自己愛が高く無い故に、学びへと向かえないという事情もあろう。「自分には良いところがたくさんある」と回答した子どもの傾向も学習理解度が高くなり、同様の結果であった。

## 2) 耐性

質問 22. 学習理解と我慢強さ

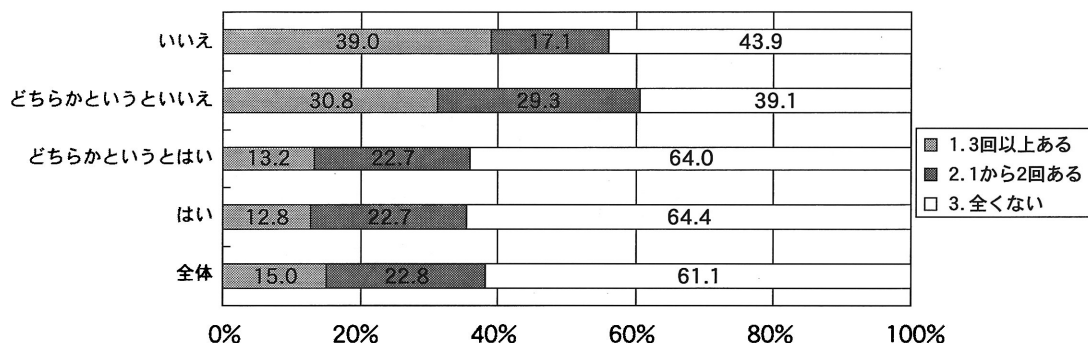


因子分析結果から自己愛と耐性は関係しているということであるが、「がまん強いと思いますか」でも学習理解度とは  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。図に見られるように、「自分のがまん強い」と答えた子どもより13ポイント「我慢強くない子ども」では低くなった。逆に「我慢強くない」と答えた子どものうち、学習理解を「はい」と答えた子どもは10.2%、「いいえ」と答えた子どもは51.2%と、41ポイント大幅に割合が上昇する。耐性が育てられず、自由に、言い換えれば放任の状況に意識無意識にされている子どもには自己愛も

育ちにくいのではと考えられる。親や教師、そして大人は子どもをかわいがるということで、ついつい厳しさに欠けてしまうことがインタビュー結果や体験活動参与観察などを通して見えてくる。今の子どもにとってこの耐性は生きていく上で、そして学びをよりよいものにしていくためには不可欠なのではないだろうか。自尊感情を高められるような、友達との葛藤体験を通して態勢を高めていけるような指導や支援が求められる。

(3) 生命観

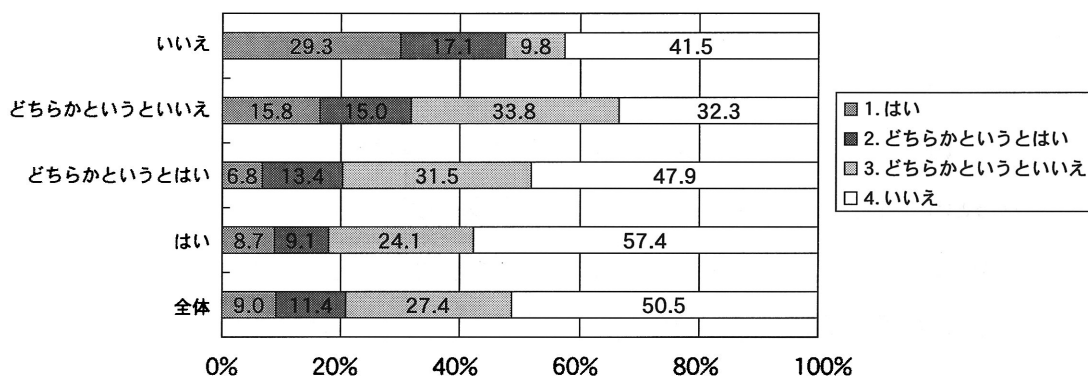
質問 32. 学習理解と生きがい



学習理解度と生命観の関係でも格差が見られた。あなたは今までに「生きていても仕方がない」と思ったことはありますかの程度別では  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。「3回以上ある」と答えた子どもで、学習理解に対して「はい」と答えた子どもは12.8%、「いい

え」と答えた子どもは39.0%と、26ポイント差がある。また次の「自分の命は自分のものだから、自分で好きなようにしてもかまわないと思いますか」という質問に関しても同様の下図のような結果である。

質問 33. 学習理解と命の価値

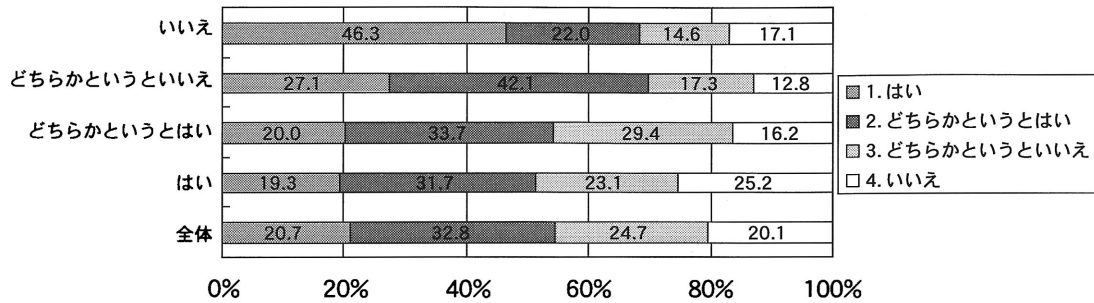


学習理解度と命の価値意識に関しては  $p < 0.001$  にて有意差が得られ、好きなようにしてかまわないと回答した子どものうち、学習理解に対して「はい」と答えた子どもは8.7%、「いいえ」と答えた子どもは29.3%

と、20ポイント割合が上昇する。命は誰のものなのか知識として知ると言うよりも、かけがえのない自分の命の有り難さを体験しながら学ぶ機会が必要であろう。

## (4) 暴力性

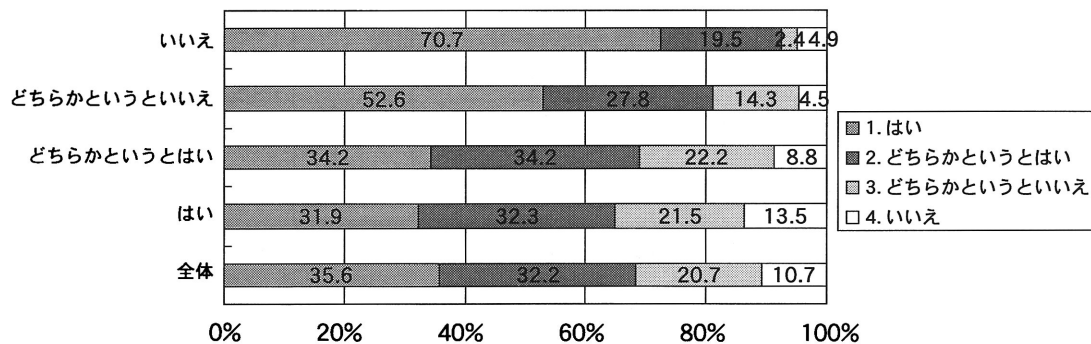
質問 27. 学習理解と暴力性



「ときどきものを殴ったり、たたいたりしたくなりませんか」といった暴力性と学習理解度は  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。暴力性に対して「はい」と答えた子どものうち、学習理解に対して「はい」と答えた子どもは19.3%、「いいえ」と答えた子どもは46.3%と27ポイント割合が高い。「むかつく」と殴りたいという気持ちの関連は高く、次の示されるように学習理解度

との関連も高く、学習理解度も低いという実態である。学びのための耐性ができていなくて、学習理解ができないまま生活している小学生の段階の子ども達が、生命感覚も薄いままむかつき、暴力性を高めているこの現状を放置したまま、青少年犯罪の凶悪化という社会問題を対症療法で対処することには限界や非効率な結果がみえてくる。

質問 46. 学習理解とムカつき

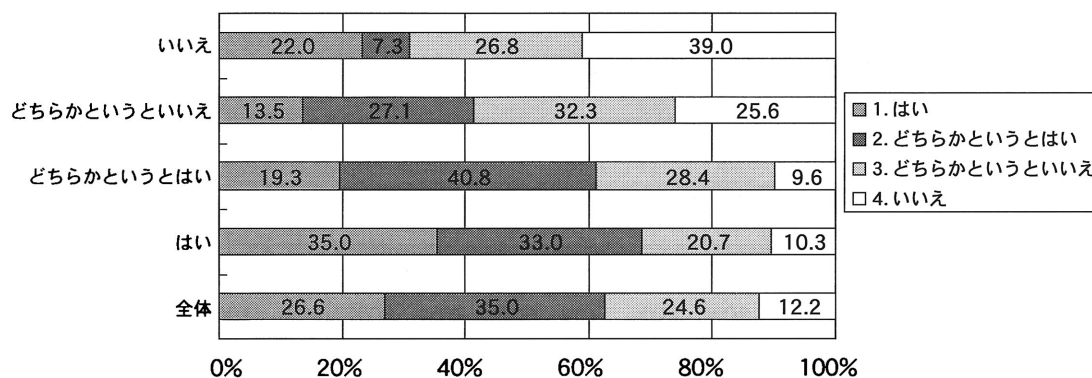


学習理解度とムカツきの程度に関しては  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。「ムカツくことがよくある」と答えた子どもで、学習理解に対して「はい」と答えた子どもは31.9%、いいえと答えた子どもは70.7%であ

る。学習できないことへのいらだちや学力が育っていないことでの居場所のなさ、そしてそれを支える自尊感情の低さが、「学び」を妨げており、ムカツかないための基本的な生活体験学習が求められる。

(5) 生活習慣と体力

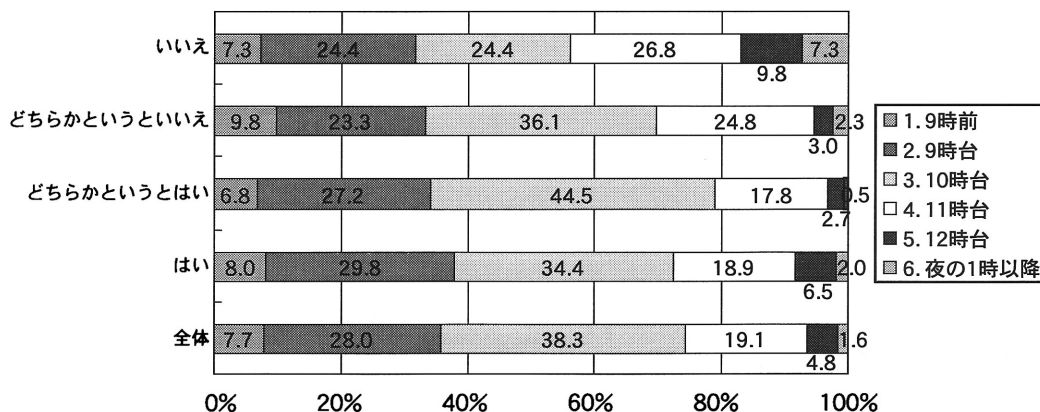
質問 2. 学習理解と朝起き



「朝気持ちよく起きること」と学習理解度は  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。「朝気持ちよく起きられる」と答えた子どもで、学習理解に対して「はい」と答えた子どもは35.0%、「いいえ」と答えた子どもは22.0%と学習理解度が高いほど割合が高い。遅く寝る子どもの差が図にみられるように大きい。学習理解ができていないと自己診断している子どもの半数近くが11時以降に眠っている。詳細にみると、学習理解度の高

い子どもの中で、勉強していることによって12時以降になっている子どもも附属小学校の子どもを中心に存在するが、多くはメディア総接触時間の長い子どもである。全体として学習理解度の低い子どもの「朝おきが気持ちよくない」割合が高い。 $p < 0.01$  にて有意差が得られたが、早く寝ていないこととメディアが関連していることが次の図からわかる。

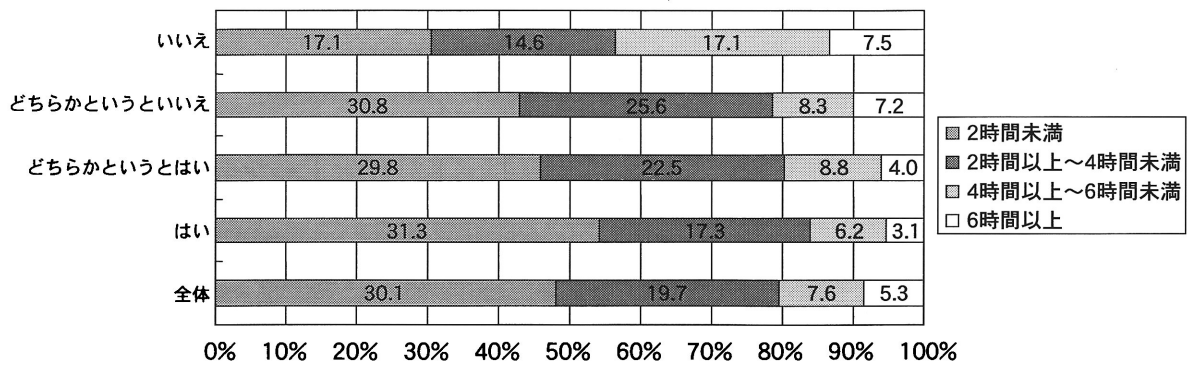
質問 4. 学習理解と就寝時間



学習理解度とメディア接触との関連をわかりやすく見るため、メディア総接触時間を4段階に置き換える

ロス集計した結果が次図である。

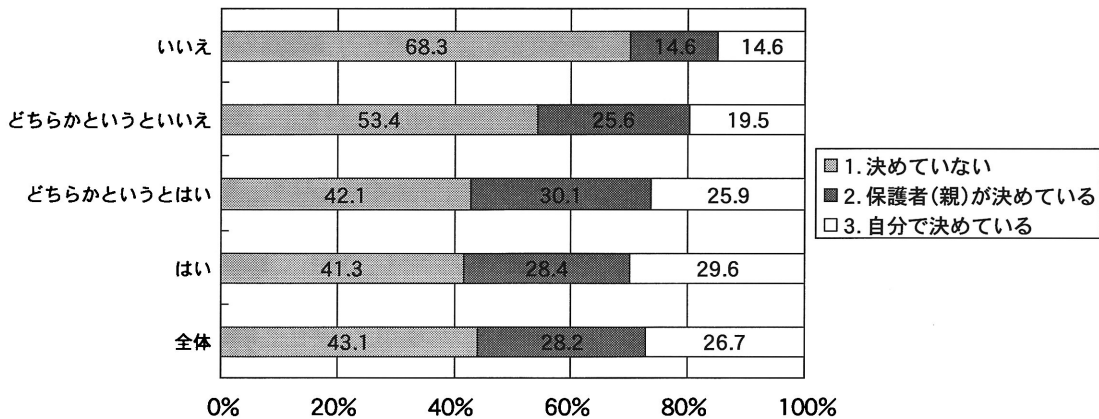
図1 学習理解とメディア総接触時間4段階（平日）



学習理解度とメディア総接触時間の関係では  $p < 0.001$  にて有意差が得られたが、メディア接触時間2時間未満で、学習理解はいと答えた子どもは31.3%、いいえと答えた子どもは17.1%と14ポイントが割合が低下する。また、逆に接触時間4時間以上の子どもで学習理解はいと答えた子どもは9.3%、いいえと答えた子どもは24.6%と15ポイント割合が増加する。さらに下図にみられるようにメディアを規制しているほど学習理解度は高い。注目すべきは親ではなく子ども自身が

自己規制している場合に特に学習理解度が高くなる傾向があり、子ども自身が主体的にメディアと関わることの重要性が学びの視点からもみられる。今、テレビ、ゲーム、ケータイ、パソコン、コミックなどメディアの時間を1つでも決めていきますか、という質問事項に対して学習理解との関係で  $p < 0.001$  にて有意差が得られたということは、メディアをミックスさせながら商業消費文化を子どもに戦略的に与えているメディア社会では特に重要である。

質問 13-3. 学習理解とメディア規制

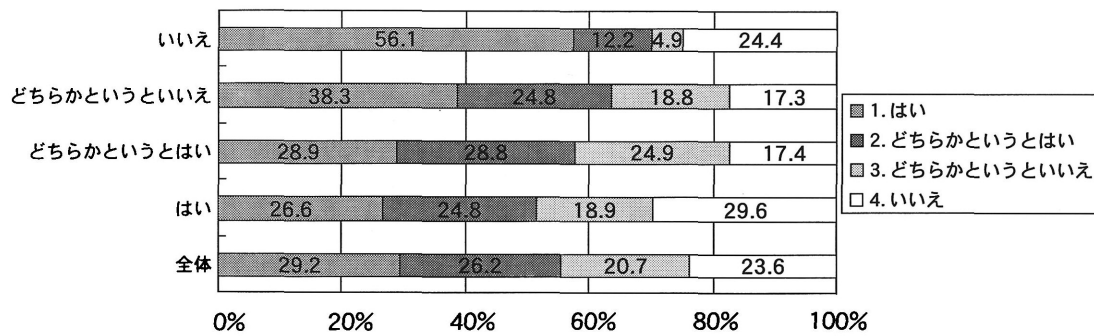


メディア接触の時間を自分で決めている子どもは、学習理解において「はい」と答えた子どもが29.6%、「いいえ」と答えた子どもが14.6%で、自己規制しているほど学習理解度は高いという傾向である。このことは、耐性があるから自己規制できるということもあろうが、逆にメディアに関して自己規制をさせていくことで、耐性を育て、家庭学習の習慣をつけ、学習理解度の向上へと向かわせるという方向が考えられよう。

体力が、特に持続的な体力がないと学びも成立しにくいということは、例えば今回のインタビューの際に

も「1時間の授業にじっと座ってられない子どもの増加」「聴く態勢をとるための背骨がしっかりしていない」と、現場の教師から聞かれる。毎年新聞報道もされている文部科学省（旧文部省）の体力測定結果あるいは論者が2003年に実施した背筋力調査（文部科学省2003年度子どものメディア接触と心身の発達に関わる調査・研究報告書39-46頁参照）などでも示されるように、ここ20年間子どもの体力は低下の一途を辿っている。

質問 48. 学習理解と長い時間立っているとつらい



例えば上図に示されるように学習理解度と「長い時間立っているとつらいですか」では  $p < 0.001$  にて有意差が得られた。「長い時間立っているとつらい」と答えた子どものうち、学習理解「はい」と答えた子どもは 26.6%、「いいえ」と答えた子どもは 56.1% と 29ポイント理解できていない子どもが高い割合である。

#### 4. インタビュー調査結果に基づく事例と考察

どのような背景や特徴を持った子ども達が生活や意識をどのような環境やきっかけや考えでどのように変化させていっているのか。地域差、学校差、家族差、個人差などを押さえながら考察する。本調査においても学校ごとの差は顕著であり、前述の荻谷 (2005) が示しているように階層間の格差もあり、特に表 3 に示すように大学附属小学校は学びの態勢がある程度できているとあってよいであろう。メディアに関する取り組みを A から E の小学校は取り組んでおり、F 小学校は「校庭ボランティア」に取り組んでいる学校である。ちなみに G 大学附属小学校は生活改善を含めた家庭教育に関して特別な取り組みは実施していない。

今回検討・考察する事例は 1 つは遊びによって子どもを活性化しようとしている F 小学校の取り組み、もうひとつはメディアとの主体的な関係づくりで生活を改善していこうという A 小学校の取り組みの二つである。双方とも、学校への愛着が高まり、学習に集中できてきているなど学習への態度に良い変化が生じてきているという概括的な評価は得られてきている。インタビューは 2006 年の 10 月から 12 月にかけて小学校 4 年生から 6 年生の男女に対して各 1 時間程度ずつ個人に対して実施された。F 小学校は 29 人、A 小学校 34 人であるが A 小学校に関しては対象児の 14 人の親にもインタビューした。内容的には質問紙調査と同じ内容をイ

ンタビューでも確認した上で、生活全般と同時に「校庭ボランティア」や「アウトメディアチャレンジ」などのそれぞれの取り組みの結果状況とメディア生活に関して集中的にインタビューを試みており、家庭での生活やメディアのあり方を示すものともなっている。今回は紙面の制約上、特徴的な事例を各 1 件ずつ分析・考察することで子どもの生活と学びに関する提案にも代える。

##### (1) F 小学校 5 年生男子 F 男

F 小学校がある宗像市は福岡県内の中都市であり、F 小学校区は全体としては通勤者の多い住宅地域である。階層的にはホワイトカラーが比較的割合が高い。今年度は算数の学力向上に学校全体で力を入れており、校内にある緑豊かな「仲良しの森」という遊び場を利用した校庭ボランティアに取り組んでいる。校庭ボランティアの取り組みは本学会の現在の会長である横山正幸が主唱し、7 年前に福岡教育大学と小学校及び保護者との共同で始まった。現在も週 3 日間学生が昼休みの 4 年生の遊びの支援に入っている。遊びによって子ども達の生活や学びを活性化しようとしている。インタビュー結果から、子ども達の約 9 割は「参加して楽しかった」と回答しており、今回の調査結果からも示されるように 7 校中 1 時間以上外遊びをする割合が約 6 割と最も外遊びが活発化しており、その後の外遊び時間の増大や子ども同士の主体的な遊びへの発展など多くの成果が出てきている。継続していることで「校庭ボランティア」は F 小学校での認知度が上がり、子ども達は当然のように参加してきているという状況ができつつある。全体として「学校が楽しい」と回答する子どもが増大し、人間関係づくり能力の育成や生活全般の活性化に成果を挙げつつあるというのがイン

表3. 学校別の子どもの生活を学び

質問内容	選択肢	全体	A	B	C	D	E	F	G 大学附属小学校	有意差危険率
3. 平日、学習塾もいれて学校から帰ってどのくらい勉強しますか？	1. まったくしない	5.4	3.3	3.7	5.4	10.7	0.0	4.4	0.8	***
	2. 30分未満	27.0	22.5	14.7	28.7	41.6	28.0	30.6	7.9	
	3. 30分以上1時間未満	31.4	30.9	41.9	39.9	28.3	52.0	36.4	17.4	
	4. 1時間以上2時間未満	17.6	22.2	25.0	16.1	13.0	20.0	18.0	17.4	
	5. 2時間以上3時間未満	6.8	10.5	8.1	6.3	3.2	0.0	6.3	10.0	
	6. 3時間以上4時間未満	5.4	4.4	3.7	1.8	1.6	0.0	3.4	20.3	
	7. 4時間以上	5.7	5.8	2.2	1.3	1.1	0.0	1.0	24.5	
	0. 無回答	0.6	0.4	0.7	0.4	0.5	0.0	0.0	1.7	
6-1. 家には子どもだけの部屋がありますか？	1. 自分だけのがある	48.1	42.5	37.5	56.5	45.7	20.0	49.5	58.5	
	2. 兄弟姉妹でいっしょのがある	40.7	40.4	44.9	37.2	45.0	32.0	43.2	33.2	
	3. いいえ	10.3	16.7	15.4	5.8	7.5	48.0	7.3	7.9	
	0. 無回答	0.9	0.4	2.2	0.4	1.8	0.0	0.0	0.4	
6-2. 子ども部屋には何がありますか？	1. テレビ	28.2	24.7	34.6	27.4	35.6	16.0	30.1	15.8	***
	2. ビデオ	16.5	12.4	22.1	17.0	19.2	12.0	18.0	11.6	
	3. ゲーム機	39.8	34.5	41.2	36.6	43.6	24.0	47.6	36.1	
	4. インターネットにつながらないパソコン	5.2	3.3	6.6	5.4	5.0	8.0	4.9	6.6	
	5. インターネットにつながっているパソコン	8.3	8.0	5.9	6.7	8.7	0.0	6.8	12.9	
13-1. 今、テレビ、ゲーム、ケータイ、パソコン、コミック・マンガを合わせて、平日おおよそどのくらいになりますか	1. 全く見ない	3.1	1.8	2.2	3.6	3.9	4.0	1.5	4.6	***
	2. 1時間未満	17.5	13.8	16.2	12.1	19.4	12.0	12.1	29.0	
	3. 1時間以上2時間未満	22.5	15.6	21.3	26.0	25.6	16.0	19.4	25.3	
	4. 2時間以上3時間未満	18.8	22.2	19.1	20.2	18.0	24.0	18.0	15.4	
	5. 3時間以上4時間未満	12.0	12.7	18.4	14.8	9.8	28.0	12.1	7.1	
	6. 4時間以上5時間未満	10.7	14.5	12.5	12.1	7.5	8.0	13.1	7.9	
	7. 5時間以上6時間未満	7.1	8.0	5.9	6.7	6.6	8.0	10.2	5.0	
	8. 6時間以上	5.3	6.9	2.9	2.7	5.9	0.0	10.7	2.1	
	0. 無回答	3.0	4.4	1.5	1.8	3.2	0.0	2.9	3.7	
16. 外遊びを平日どのくらいしますか	1. 全くしない	15.3	14.2	6.6	12.1	12.1	8.0	11.7	34.0	***
	2. 1時間未満	38.6	30.2	38.2	44.8	42.0	64.0	28.2	42.7	
	3. 1時間以上3時間未満	30.1	39.6	36.8	26.0	26.5	24.0	40.3	17.8	
	4. 3時間以上	14.8	14.9	16.9	16.1	18.0	0.0	18.4	4.6	
	0. 無回答	1.2	1.1	1.5	0.9	1.4	4.0	1.5	0.8	
19. 友だちがいじめられたりしているのを見ると腹が立ちますか	1. はい	45.6	38.9	53.7	55.2	44.5	16.0	46.1	44.4	***
	2. どちらかというとはい	39.1	48.0	38.2	36.3	37.2	64.0	37.9	33.6	
	3. どちらかというといいえ	9.1	8.0	5.1	5.4	10.3	12.0	10.2	12.9	
	4. いいえ	5.2	4.0	2.9	3.1	6.6	8.0	4.4	7.5	
	0. 無回答	1.0	1.1	0.0	0.0	1.4	0.0	1.5	1.7	
20. 学校の勉強は理解できますか	1. はい	49.1	50.5	42.6	43.0	46.1	24.0	45.6	67.6	***
	2. どちらかというとはい	38.3	36.7	47.1	42.2	37.9	56.0	43.7	25.7	
	3. どちらかというといいえ	8.6	8.7	8.1	11.2	10.3	20.0	6.8	3.7	
	4. いいえ	2.7	2.5	2.2	3.6	3.4	0.0	1.5	2.1	
	0. 無回答	1.4	1.5	0.0	0.0	2.3	0.0	2.4	0.8	
24. 人のために何かしたいと思っていますか	1. はい	38.7	41.1	55.1	37.2	35.6	40.0	31.6	39.8	**
	2. どちらかというとはい	40.5	38.5	36.8	47.5	39.7	44.0	44.7	36.1	
	3. どちらかというといいえ	14.6	12.7	8.1	12.6	16.7	16.0	16.0	17.0	
	4. いいえ	4.4	4.7	0.0	1.8	5.5	0.0	6.3	5.8	
	0. 無回答	1.7	2.9	0.0	0.9	2.5	0.0	1.5	1.2	
38. 勉強は楽しいと思いますか	1. はい	20.9	21.1	32.4	17.5	21.7	12.0	18.0	19.1	*
	2. どちらかというとはい	36.9	36.0	36.0	43.9	32.4	44.0	40.3	36.1	
	3. どちらかというといいえ	26.0	28.0	16.9	24.7	27.6	32.0	30.1	22.8	
	4. いいえ	15.5	13.8	14.0	13.9	17.1	12.0	10.7	21.2	
	0. 無回答	0.8	1.1	0.7	0.0	1.1	0.0	1.0	0.8	
43. 一人でいるほうが落ち着きますか	1. はい	25.8	24.7	25.7	27.8	22.6	16.0	23.3	34.0	**
	2. どちらかというとはい	18.0	20.4	25.7	16.6	13.2	20.0	20.9	18.3	
	3. どちらかというといいえ	23.6	25.5	23.5	22.9	21.7	36.0	27.2	21.2	
	4. いいえ	32.1	29.1	25.0	32.7	41.6	28.0	28.2	25.7	
	0. 無回答	0.5	0.4	0.0	0.0	0.9	0.0	0.5	0.8	

タビュー結果からの考察である。

### 1) 生活全般、「校庭ボランティア」(昼休み遊び支援) についての過去・現在・未来

家庭での学習時間は「1時間以上2時間未満」であり、相対的には家庭学習ができており、学校の勉強は理解できる「はい」、勉強は楽しい「はい」と回答している。外遊びは「1時間以上3時間未満」とできており、人権意識、自尊感情、生命感覚も高い。しかし、耐性・持続性は強くなく、クラスの仕事は責任持たず、暴力性もある。

校庭ボランティアの取り組みに関しては「校庭ボランティアは知っている。4年生のとき参加していた。野球、サッカー、バレーなどをしていて、どれもまあまあ楽しかった。サッカーはその中では一番楽しかった。校庭ボランティアに参加していてよかった。もし今、校庭ボランティアでサッカーをしているならまた参加したい。鬼ごっこ、花いちもんめなどの女の子らしい遊びはいやだった。」という意見である。男子の場合、校庭ボランティアではなく自分たちで遊ぶと言う子どもが比較的多かった。そうした中、年齢が近い大学生によって「花いちもんめ」などのいろいろな遊びを体験することは、改めて自分の好きなスポーツ等の認識を深めていったようであり、現在でも外遊びを続けていることもわかり、人間関係づくりの力量を無意識に高めていることがうかがわれる。

### 2) メディアについて過去・現在・未来

テレビについては「平日は約1時間から2時間くらい見ている。アニメを基本的に好んで見ている。ドラマやニュースはほとんど見ない。よく見るテレビ番組は、世界まる見え、コナン、アイシールド21などである。子ども部屋は妹と一緒にいる部屋があるがテレビはないため、居間で見ている。食事中はテレビを見ない。最近は塾に通い始めたため、以前より見る時間が減った。テレビは妹と一緒に見ることが多い。」という結果であった。

ゲームについては「ゲームは家にないため全くしない。しかし、友達の家遊びに行った時に友達がゲームをしだしたら、一緒にする。そこでよくやるゲームソフトはウイニングイレブンで、友達と対戦をする。」ということであり、ゲームはやはり魅力的なようであり、家になくても他でする可能性は考えておく必要が

ある。

テレビ・ゲーム・インターネットをどう制限しているかでは、「制限は最近親に決められている。その前は自分で決めていた。大体1日平均3時間くらいだった。しかし、最近視力の低下が激しくなり、これ以上視力を下げてはいけないと思い、親に注意してもらうようにした。小学校就学前の4歳から5歳までのときは1時間までと親に決められていた。」ということである。遊びの活性化により生活が豊かになり、生活時間も計画的にできるようになる可能性が出てきている。「もしメディアがなかったら、文句を言う。また、どうしてもだめだったら、自分でつくる。メディアの良いところは、感動や面白さを感じることができる。悪いところは、平面で立体感がないところ。立体感があるのが欲しい。」と回答している。しかし、外遊びによる人間関係の深まりにより、メディアと一時的に離れられる力量が徐々にではあるが付いてきつつあり普段はテレビを見ていても親のきつそうな姿を見ると、洗濯物を干したり茶碗を洗ったりするといった、やさしい面が生じてきている。「以前はスイミングとピアノを習っていたがやめた。」という。お手伝いも自分からするようになってきたという変容が見られ、そのことによって自信も増大してきていることが推測され、学習にも関心が移りつつあり、今後の継続が重要である。

### (2) A小学校 4年生女子A子

A小学校がある蕨市は埼玉県の中都市であり、人口の密集した住宅地域である(人口密度日本一)。階層的にはホワイトカラーの割合が高い。

#### 1) 生活全般と「アウトメディアチャレンジ」について

学習時間は30分から1時間と多いとは言えないが、それなりにしている。就寝は9時台であり睡眠時間は有る程度ととれている。外遊び(まったくしない)はこれまでも少なく運動不足(1時間未満)が推測される。すっきりと起きれるわけではないが「どちらかという気持ちよく起きられる」

本を読む習慣はなく。親もこの子どもは「本に興味がないのでは」と回答している。メディアに主体的に関わろうと学校から呼びかけられている「アウトメディアチャレンジ」は学校からという意識はなく、自



分で決めてゲーム30分以内だが、ゲームボーイは一日1時間毎日しているようで自己規制がどれくらいできているかは疑問である。もしチャレンジをしていないとすると無制限になり、メディア接触時間は間違いなく増大し、睡眠時間は削られるであろう。そういう意味では、チャレンジはメディア接触時間の軽減、生活習慣の改善に多少は成果があったといえよう。

### 2) メディアについて過去・現在・未来

アニメが好きでテレビは結構見ており、平日のメディア総接触時間は3から4時間と短いとは言えない。総接触時間の意味の大切さを知らせていく必要があるのではと思われる。メディア以外の家庭での活動が特にないのではと思われる。

テレビをすぐにつけてしまう癖があり、見たいテレビがなくてもつけてしまう。親もメディア好きは同様に、食事中もテレビがついていることが多い。

2年生の弟はゲーム制限で外遊びが増えたが、4年生の姉のA子は外遊びへの愛着やメディア以外での充実した活動体験自体が不足しているのではと思われる。

### 3) 親の意識

親は自分の子どものコミュニケーション能力不足を意識しており、その原因を親子のコミュニケーション不足などの親子関係の影響だと捉えている。「テレビには子どもは執着していない」と捉えているが、「テレビが付いているとついつい見ている」と捉えており。「自分の子どもの頃の平均2時間よりも多い」とは捉えている。「テレビのプログラムに子どもが欲しい」と考えている。「子どもはゲームの時間を守ってやっており、子どもの自主性に任せているのが良い」と捉えている。ノーテレビデイは旅行の日にするといい、日常化への意識は薄いようである。ただし、「メディアでのゲームのCMは止めて欲しい」といった訴えをするなど、自分でもメディアの問題性に気づきながら外部の手助けを求めているとも捉えられる。子どもと定期的に交換日誌をするなど努力はしている。メディアに関しても親は子どもの心身の発達に及ぼす総接触時間の問題を考える必要がある。この事例からは親だけでのメディア生活の改善は難しいとも考えられる。

学校からという意識はないが、なんとなく回りから進められてという感じであり、家庭や学校でメディア接触の問題性を理解させることが必要ではと思われる。

メディアの良いところ悪いところでも、悪いところでは悪い情報が流れると言うだけの捉え方であり、メディアが奪う子どもの大切な体験活動や親子の交流、そして心身の発達への問題等の啓発を行う必要が有ろう。

以上事例をみてきたが、ここで総合的な考察を3点にまとめる。

#### 1. 一生涯を見通した「学び」を配慮した生活の改善を

人権意識を基本とした生身の人間世界でもまわることが一生涯の学びには不可欠であり、子どもを通して、あるいは異年齢での対話を通して学び・成長していくという視点は重要である。大学の付属小学校の調査結果にみられるように勉強していても「勉強が楽しくない」と生涯教育にとっては好ましくない結果も予想される。しかし、睡眠を十分に取ったりといったように生活習慣を学びにとってよりよいものに変容していくことは現在子どもに求められている最重要の課題の一つであろう。

#### 2. 生活と学びの充実のための各分野の連携を

生活変容、特に家庭での基本的な生活習慣のよりよいリズムづくりは家庭が責任を負うべき事項であろう。しかしながら、家庭においては全体として子どもに甘い家庭が増加し、厳しく生活を自律させていくことは難しい。そこでは親だけに任せるのではなく、特に子育て環境が厳しい家庭には様々な分野の社会的な支援が求められる。将来的には厳しい子どもには教育、福祉、生活の分野等からチームとして総合的に関わる態勢が必要であろう。

#### 3. 子ども自身が生活と学びを変容させられる体験学習を

メディアに関するよりよい生活変容は親が規制するのではなく、子ども自身が自制した方が効果は大きいことが明確となった。今後は子どもの参画、主体性を生かした生活体験学習が学びとの関連の中で求められよう。その際、失敗体験を活かしたり、責任をもった活動をしていく必要がある。

大人は子どもの体験を学びへと導くために子ども自身が自省し、次への実践へと向かう支援・促進を見守る姿勢を持つことが重要である。